

北米における高等学校卒業程度認定試験 General Educational Development Test について

石岡 恒憲 (大学入試センター)

GEDはAmerican Council on Educationが主催し、GED Testing Serviceがテストの運営を行う高等学校卒業程度認定試験である。本稿ではまずGEDの歴史から試験構成、科目の詳細、合否基準について報告する。次にGEDに対して一般に言われている批判を整理し、日本の高等学校卒業程度認定試験との比較についてまとめる。最後にGED受験者に関する各種統計量を要約する。

1 はじめに

GED は北米（アメリカとカナダ）で通用する高等学校卒業程度認定試験である[1]。American Council on Education が主催し、GED Testing Service がテストの運営を行っている。GED をパスするためには、実際の北米の高校最終年生の上位 60%相当の学力を示す必要がある。この数値は、アメリカにおける高等教育への進学率：48.9%（フルタイム）+12.5%（パートタイム）=61.4%（2001年）の数値にほぼ一致する。州によってはさらに付加的なテストを要求する。合格した場合、受験した州の公立高校と同等の学力であることが認定される。ただし、高校卒業証書に代わるものではない。

GED はもともと第2次大戦後の退役軍人が市民に戻った後に、中途であった高校の課程を修了させるために設けられた。現在の受験の動機としては(1)高校卒業証書の代わりとして（移民に多い）、(2)自宅学習の証拠として、(3)高校を退学したため（早期における勉学への興味の喪失、落第、あるいは個人的理由による）、などが挙げられる[3]。GEDの受験者は現在までに1,500万人を超え、高校生の7人に1人が、大学生の20人に1人が受験している。GED資格を得たうちの70%は20歳以上であり、平均年齢は24.1歳である。

英語に加え、スペイン語、フランス語、拡大文字、音声カセット、ブライル点字で受験することができる。テストは毎年随時、定められたテスト設備を持つテストセンターや軍事施設で実施される。北米以外に居住する者は、オンラインで受験することができる。

2節ではGEDの歴史から試験構成、科目の詳細、合否基準について報告する。3節には、GEDに対する批判を述べ、4節に日本の高等学校卒業程度認定試験との比較についてまとめる。5節にはGED受験者に関する各種統計量を要約する。

2 概要

2.1 歴史

GEDテストの開発は1942年に遡る[2]。当初は教科科目が主であったが、1978年には教科科目に加え、(単純暗記でない)論理的思考力(Critical Thinking)が試されるようになり、1988年には作文試験が追加された。より強調すべきことは、社会的に関係のある話題が取り扱われ、またより問題解決型のスキルが要求されるようになった。またはじめて、進学目的で受験する者(65%)が、就職目的での受験者(35%)を上回った。現在は2002年からのバージョンが使われており、よりビジネスに関係するトピックが含まれ、科学的な実験の指揮(conduct)や結果の解釈、集めた情報

の適用について説明することが求められるようになった。作文については、特定の文化に偏らないよう配慮がされている。2011年からは新しいバージョンになることが決定している[1]。

2.2 予備テストと登録

GED テストを受験する前に多くの場合、予備テストを受験し、GED 受験に値する能力レベルにあることを示す必要がある[4,5]。ほとんどの州で、受験生は数学と自分の選ぶ科目の計 2 科目について受験することが求められる。ただしエッセイを受験することはできない。予備テストは実際に GED に用いられる可能性のある 25,000 の質問の中から選ばれる。時間制限はない。通常、15 ないし 20 問について解答する必要がある。

登録には、受験者本人であることの証明と居住証明が必要である。本人であることの証明は、運転免許、出生証明(birth certificate)、パスポートなどで行われる。受験生は、必要書類を添えて、公立スクールあるいは成人教育機関に申請する。18 歳に満たない場合は、現在、高校に在籍していないことがそこで確認される。州によって異なるが、1 週間から 3 か月の間、実際の GED 試験まで待たされる。

2.3 テスト準備

アメリカでは合衆国政府による成人教育プログラム(Adult Education Program)が 1960 年代から機能している[5]。その目的は、成人の中等教育の完遂を支援することにある。無収入や低所得であっても、全米各地で、このプログラムが利用できる。実際、これによって多くの人が GED を取得している。はじめて受験する人の合格率が期待よりも低い(30%)のために、幾つかの成人教育プログラム委員会は、GED を受験する前にこのプログラム教育を受けるか、あるいは 1 度落ちた場合に再教育プログラムを受講することを要

求している。

このプログラムでは授業は週 1 度で、高校の授業のやり方と同じである。通常、テキストが使われ、ときどき宿題が出される。個人教授も一部、地域によっては提供される場合がある。GED テストでは、非常に広範な学問領域にわたって出題されるため、授業やテキストでは多くの話題が取り上げられる。例えば中世史を学ぶには数か月を要するが、最終的な GED テストには出題されないかもしれない。本プログラムは、単に GED 受験のための詰め込み教育を行うのではなく、広範な知識の理解を求めているといえる。

2.4 テスト日時

GED テストは、ライティング、社会、科学、読解、数学の 5 科目からなる[1]。数学では電卓の使用が許されるパートと許されないパートがある。多くの州でテストは 2 日あるいはそれ以上に分けて実施される。大会場では、受験生は連続する 2 日間や、2 週連続する週末に受験することができ、自分の都合のよい日時を選ぶことができる。この試験は年間を通じて、随時、実施されている。

2.5 構成

テスト科目、問題数、解答時間は以下の通りである[1,4]。

表 1 : GED のテスト構成

| | | |
|-------------------------|------|------------|
| ライティング(Writing, Part I) | 50 問 | 75 分 |
| エッセイ (Writing, Part II) | 1 題 | 45 分 |
| 社会 (Social Studies) | 50 問 | 70 分 |
| 理科 (Science) | 50 問 | 80 分 |
| 読解 (Reading) | 40 問 | 65 分 |
| 数学 (Mathematics) | 50 問 | 90 分 |
| | | 計 7 時間 5 分 |

ライティング(Writing Part I)は文章の構成(30%)、組織化(15%)、語の使用法(30%)、

技巧(25%)を問う。資料文を与えて正しい文を選ぶことや正しいアメリカ英語に修正することが求められる。よくあるミス・スペルや主語や述語の対応、大文字の使用などが含まれる。Part II では、実際にエッセイを書くことが求められる。エッセイは最低でも5つのパラグラフで導入、本論、結論の3つの部分を含んでいなければならない。話題(トピック)は特定の知識や既読が有利にならないよう配慮される。多くの人にとって親しみやすい一般的なトピックが選ばれる。たとえば、ティーン・エージャーの激しい(violent)音楽の影響、子供のいないライフスタイルの有利な点と不利な点、現代社会において学位を得ることの重要性などである。エッセイは2人のレビューによって独立に採点される。最低が1で最高が4である。スコアは平均され、もし平均スコアが2よりも小さければPart I は採点されない。つまりライティングを再度、受験しなければ合格とはならない。

社会はアメリカ史(25%)、世界史(15%)、市民社会(25%)、経済(20%)、地理(15%)から構成される。社会の問題は、資料文を読み設問に答える多肢選択の問題である。図やグラフも併用される。

理科は生物(45%)、地学(20%)、物理(35%)より構成される。多くの設問は地図やグラフ、ダイアグラムなどの図を含んでいる。光合成、天気、風土帯、地理学、磁性、エネルギー、細胞分裂などが問われる。幾つかの問題は、外部の知識(問題文に与えられていない知識)を要求するが、この場合は日常の身の回りのことについて問われる。例えば「漂白剤を混ぜると危険な家庭にあるもの(product)は何か?(答え:アンモニア)」などが出題される。

読解は与えられた素材文に対して、その主題、語句、提示された考えなどについて、1つの素材に対し約5問の設問に解答する。全部で8つの素材があるが、その内訳はノンフィクション2つ、フィクション3つ、詩1つ、戯曲2つである。素材は小説ならば Willa

Cather の My Antonia、詩ならば Maya Angelou や Robert Frost など有名なテキストが選ばれるが、事前にそれらの作品を読んでいることを想定はしない。

数学は2つのパートに分かれており、前半については計算機の使用が認められている。数学の内訳は数と演算(20-30%)、測定とデータ解析(20-30%)、代数(20-30%)、幾何(20-30%)の4分野である。設問の約20%が標準的なグリッド(自分で任意の正解を作成できる解答形式)と座標平面によるもので、残りの80%が多肢選択である。一般的なトピック、たとえば円周、平方根、比率と比例、分数の掛け算と割り算、体積、指数、角度、ピタゴラスの定理などが出題される。電卓はテスト会場で配布される。持ち込みは許されていない。計算用紙も配られる。内容についての質問は許されていない。

2.6 テストの運営

北米、すなわちアメリカとカナダで3,500以上のテスト会場がある[1]。GEDには約25の異なった版があり、カンニングができないようになっている。それぞれの版には色と番号(たとえば「黄色の3番」)がついており、受験者は同じ版の試験問題を仕上げなければならない。同じ会場の別の受験者は異なった版を使用する。版によって難易度や問題数に違いはない。

2.7 障害者に対する配慮

目が十分に見えない受験生に対しては、音声つき計算機(talking calculator)に加え、ブライル点字、音声問題、拡大文字の使用が認められる[1]。身体的な障害者には、延長時間、代筆、頻繁な休憩、個室の利用等、必要な措置が認められる。手話通訳や、受験地に行くことができない場合は自宅や医療施設内での受験も可能である。学習障害、たとえば難読症、注意障害、アスペルger症候群などの場合は、その旨の証明をもって配慮が可能とな

る。延長時間、個室の利用、その他必要とされる措置が講じられる。

これらの措置を受けるためには、予め定められた期限までに、障害の存在を示す文書をテスト実施責任者に提出しなければならない。期限に遅れたときは必要な措置を受けることができない。このルールの例外は、テスト受験数日以内の骨折と入院に限られる。この場合、次回に受験を延期することもできる。

2.8 GED をパスするには

現在用いられている GED2002 年版では、スコアは各テストにおいて最低 200 点から最高 800 点である[1]。したがって 5 科目合計の最高点は 4,000 点である。アメリカの高校卒業生の標本から得られた平均点は各テストにおいて 500 点 (合計 2,500 点) に設定されている。アメリカの高校卒業生の約 2/3 が 400 点から 600 点のスコアを取り、300 点以下あるいは 700 点以上のスコアを取るのはそれぞれ約 2% である。(統計的な用語でいえば、平均 500 点、標準偏差 100 点の正規分布に基準化されたスコアが与えられることになる。)合格レベルは、高校卒業生の上位約 60% である。ただし、各科目に最低点が設けられており、最低で 410 点、平均で 450 点を満たさなくてはならない。つまり、合格には合計で 2,250 点以上が必要で、どの科目においても 410 点を下回ってはいけないことになる。

カナダで実施される英語版の GED テスト (他にフランス語版がある) の合格基準点は、カナダの高校卒業生のデータ (1987-1988 Canadian-specific norming study) に基づいて別に作成されている。カナダの高校生の成績はアメリカの高校生のそれよりも良いので、カナダにおいては合格基準点は 450 点より高く設定されている。GED テストの成績は 3 年間で有効で、再受験した場合に良い方のスコアに置き換わる。ほとんどの州では、1 年間に受験できる回数が制限され (通常 3 回まで)、再受験には最低数か月の待機期間が設けられ

る。再受験には受験料は必要となるが、何回でも受験することができる。

GED の資格は受験生が居住し受験する州あるいは地域によって発行されるが、採点はメリーランド州にある National Testing Service によってなされる。他の高校卒業証書と同様に全米のどの州においても有効 (valid and accepted) である。

2.9 大学と GED

全大学の約 95% が GED 資格生を受け入れている [6]。もちろん、その場合でも SAT や ACT の少なくとも一方が受験に際して要求される。さらに推薦状が必要な場合もある。もしある 4 年制大学が GED 資格生を受け入れない場合でも、アメリカのコミュニティ・カレッジに進学しその後、転学することでその 4 年制大学に入学することができる。多くの大学で、特に州立大学で特に GED 資格生のために奨学金や別の助成が用意されている。

3 GED への批判

批判の中で最大のものは、テストの大半が多肢選択であることである。他には読解テストがあまりに単純であること、数学においては基本的な演算が多すぎ、より上級の代数や幾何の問題が少ない、などが挙げられている [6]。

GED を支持する人によれば、最初の試験で不合格となる率は 70% であり、受験生の大半が高校の落第生や犯罪者であることを考慮しても、このことは一般に考えられているよりも試験が難しいとしている。テストは 2002 年から更に難しく改訂された。最も重要な改訂は、多肢選択において正解をあて推量するのをより難しくした。たとえば数学の代数や幾何においては、正解を選ぶだけでなく、その見つけ方に説明を求める。また数学やライティング (Writing Part I) では、多肢選択であっても、多くの場合、選択肢の中に「(正解を求めるのに) 十分な情報が与えられてい

ない」、「上記に正解はない(他に正解がある)」、「正解が(本質的に)存在しない」が含まれる(これらが選択可能である)。

4 日本の高等学校卒業程度認定資格検定(高卒検)との違い

日本の高卒検は高校での単位認定に代わるものである[7]。したがって、高卒検では試験科目数が8科目(現代社会を選択した場合)、あるいは9科目(倫理及び政治・経済を選択した場合)と多い。参考までに高卒検の具体的な試験科目及び合格要件は次の通りである。

国語(必修)、地理歴史：世界史A・Bのうち1科目必修、日本史A・B、地理A・Bのうちいずれか1科目必修、公民：現代社会1科目または倫理、政治・経済の2科目どちらか必修、数学(必修)、理科：理科総合、物理I、化学I、生物I、地学Iの5科目のうち2科目必修、外国語：英語(必修)。(旧大検の一部科目合格者に対しては、旧科目に相当する科目の受験が免除される。)

それゆえ、高卒検では高校で単位認定された科目については受験が免除される。極端な場合、わずか1科目の合格でも高卒検の合格を得ることができる。

一方、GEDは単位認定に変わるものでなく、あくまでも学力認定を目的とするものである。したがって、試験科目もライティング(エッセイを含む)、社会、理科、読解、数学の5科目に絞られ、また全科目受験による一定基準のクリアが合格の要件となる。

これより、2つの試験は試験の抛り所する考え方が基本的に異なっていることがわかる。また高卒検の受験機会は年2回(8月と11月)のみであり、GEDに比べ少ないことも大きな違いといえよう。

5 統計

本節ではGED受験者を全米の人口統計(2000 U.S. Census)と比較し、GEDを受験している層の実態や傾向を明らかにすることを目的とする。

5.1 高卒資格を得ていない者

2000年の全米の人口統計によれば、16歳以上の高卒証書のない、就学中でもない、したがって高卒証書のない大人は3,900万人おり、これは大人全体の18%に相当する。全ての州とDCとで少なくとも10%以上の大人が高卒でもなく、就学中でもない(図1)。

FIGURE 1
Percentage of U.S. Adults Without a High School Diploma, by State

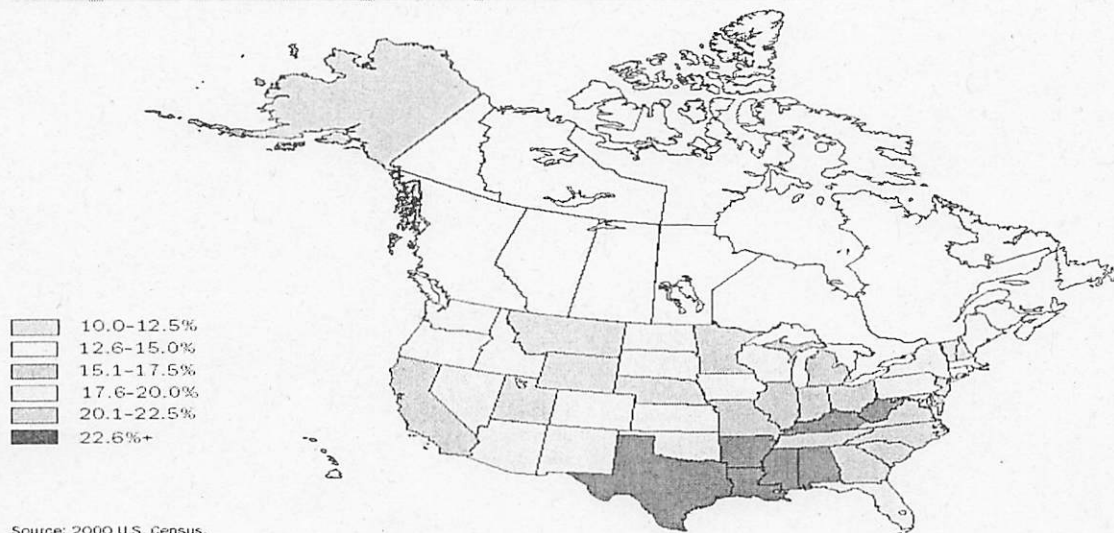


図1：全米における州ごとの高校卒業証書を有していない大人の割合

高卒証書を有しない者は南部の州に多く、ウェストバージニア州からジョージア州、テキサス州に及ぶ。カリフォルニア州も多い。これらの州では、5人に一人の大人が高卒証書を有していない。

2000年の全米の人口統計から観察される高卒証書を有しない大人の属性分類をおこなったのが図2である。18歳を超える大人で高卒証書のない者は16%おり、男性では16%、女性では15%である。属性の違いによる最大の不均衡は人種(Race/Ethnicity)であり、ヒ

スパニック(40%)と白人(13%)の差が最も大きい。高卒証書を有しないヒスパニックの割合はアフリカ系アメリカ人と比較しても、これより19%、アメリカ原住民とは16%高い。比較的、高卒証書を有しない率が低いのは、アジア人/太平洋島しょ民(14%)と白人(13%)である。

家庭の収入が連邦の定める困窮ラインかそれ以下である大人は、1/3以上(34%)であり、困窮ラインより上であるとするものが13%である。

FIGURE 2
Percentage of U.S. Adults¹ in Key Demographic Groups Without a High School Diploma

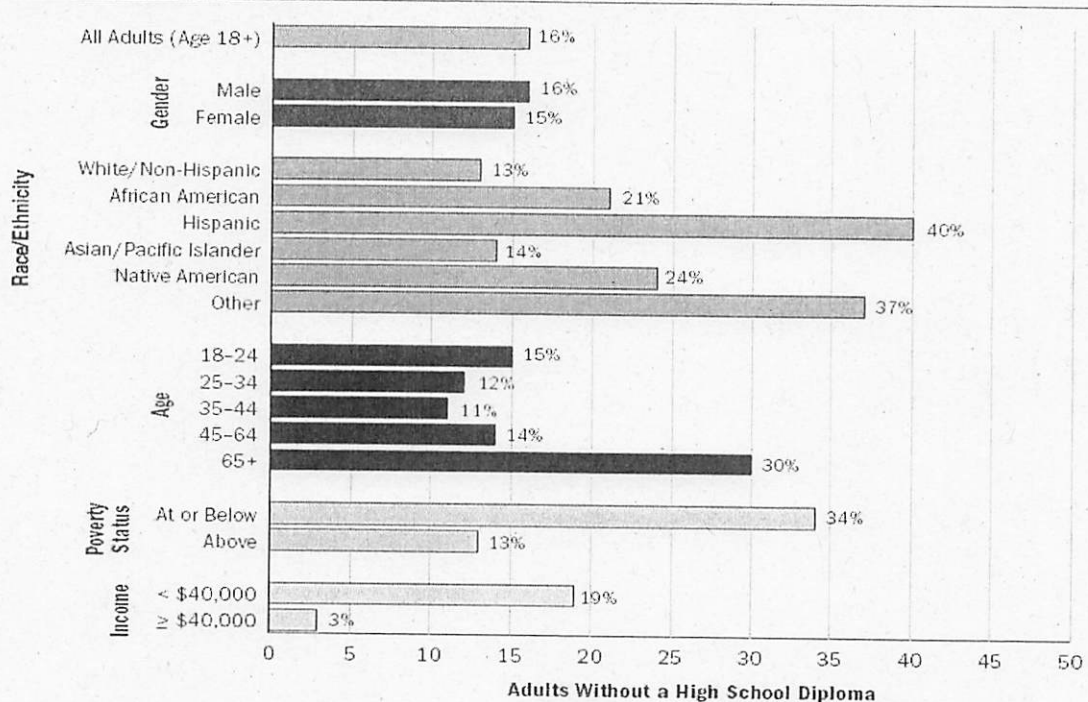


図2：全米における高校卒業証書を有していない大人の人口統計学上の属性分類

5.2 GED 試験を受験する者

2000年では、アメリカの大半の州とカナダの全州で、高卒証書のない大人の受験割合は2%以下である(図3)。高卒学位が必ずしも人生の成功をもたらすものではないことは確かであるが、(実施母体である)GED Testing Serviceは、高卒レベルでの教育の証明を得ることで何かしらの利得を得ることができる

ように成人を導くような市場を拡大することを目指している。

州ごとの高卒証書を必要とする割合とGEDを受験する割合とは確かに正の相関があるが、必要とする率の高い州が必ずしも高受験率であるわけではない。高卒証書を有しない率が高い(20%以上)13州において、受験率が2%を超えているのは、わずかにミシ

シッピー州とジョージア州に過ぎない。高卒証書の無い率が17.6%から20%である8州においては、受験率が2%を超えるのは、アリゾナ、ニューメキシコ、バージニアの3州である。

反対に高卒証書を有しない率が低い州にある場合は、GEDの受験率は高い傾向にある。たとえばアラスカ州では、高卒証書の無い大人の6%が受験している。他の同様な高卒証

書を有しない率が低い州においても、2-4%（の高卒証書の無い大人）が受験している。

2006年度のGED受験者の全体について言えば、高卒証書の無い大人の1.5%が5科目中1科目以上を受験し、1.3%が全科目を受験し、0.9%が試験に通っている。言い換えれば、高卒証書の無い大人の100人に一人がGEDに合格していることになる。

FIGURE 3
Percentage of U.S. and Canadian Adults Without a High School Diploma Who Took the GED® Tests, by State or Province/Territory: 2006

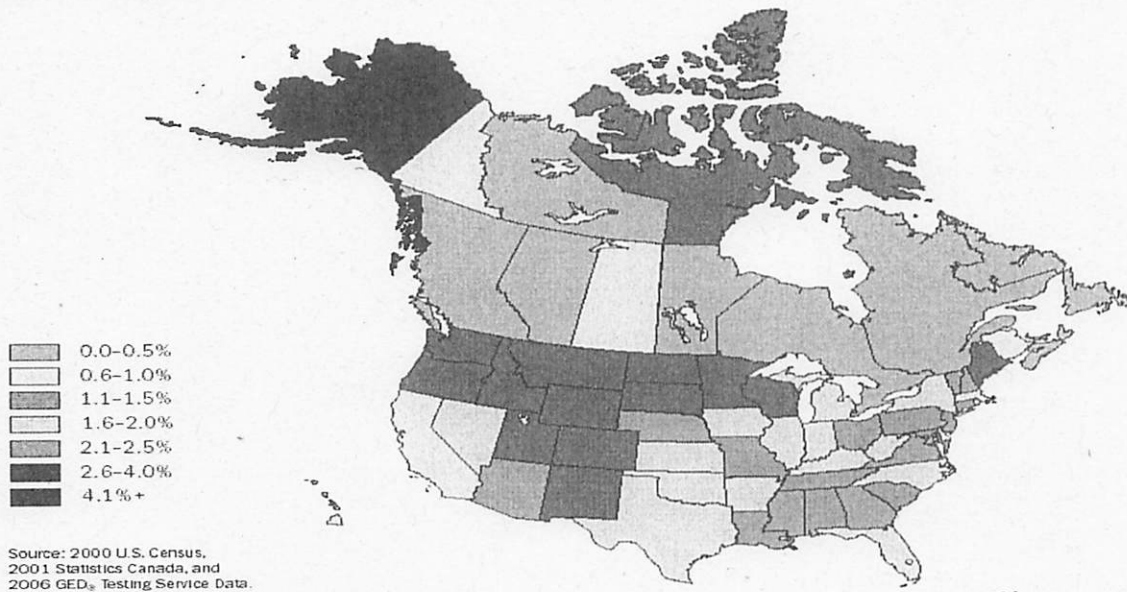


図3：北米の州ごとにおける高校卒業証書を有していない大人でGED試験を受験する者の割合

参考文献

[1] ACE: General Educational Development Testing Service
<http://www.acenet.edu/AM/Template.cfm?Section=GEDTS>

[2] ACE: History of the GED Tests,
<http://www.acenet.edu/AM/Template.cfm?Section=GEDTS&TEMPLATE=/CM/ContentDisplay.cfm&CONTENTID=8101>

[3] ACE: *The 2006 GED® Testing Program Statistical Report*
<http://www.acenet.edu/AM/Template.cfm>

?Section=GEDTS&TEMPLATE=/CM/HTMLDisplay.cfm&CONTENTID=24596

[4] A Complete (& Free) GED Preparation Course: <http://www.gedforfree.com/>

[5] GED Preparation Resources on the Web: <http://www.umbc.edu/alrc/GED1.html>

[6] GED: <http://en.wikipedia.org/wiki/GED/>

[7] 高等学校卒業程度認定試験（旧大学入学資格検定）
http://www.mext.go.jp/a_menu/koutou/shiken/index.htm